

---

# My fair Lady

床

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

M y f a i r L a d y

### 【Nコード】

N 4 7 2 0 G

### 【作者名】

床

### 【あらすじ】

ロンドン橋ミステリー。サイコホラー。あらすじ書けません。

なだらかな曲線を描く白いものを、撫でていた。ひびの入ったざらざらとした手触りの、硬質なもの。冷たいけれど、これは僕の心をいっぱいに満たしてくれる。修復するのにかなりの時間がかかってしまったけれど、お陰でこれはきつと、元のままの姿に戻った筈だ。いまだに薄汚れてはいるが、僕はそれでも構わない。温度など一かけらも感じられないこれを撫でていると、自然に口元が緩んでしまう。

幼い頃からずっと、憧れ続けていたもの。自分はある風になる事は出来ないから、せめて守り続けた者の一部でも、欲しかった。欲しくて欲しくてたまらなくて、やっと、手に入れた。

僕はあの建造物が好きだったのじゃ、ないんだ。ずっと見ていたのは、君の事。今までうるさかっただろう。でも、もう大丈夫。あんなものを守る必要なんて、もうないんだ。

あんな所に閉じ込められたままにいるくらいなら、僕に愛でられていた方が随分ましだろう。その方がずっと、いいだろう。そうに違いないさ。君もそう思うだろう。

目線の高さまで持ち上げて、僕はぼっかりと空いた二つの穴を見つめる。愛しい恋人と、何十年かぶりの再会を果たした時のように、心が躍る。頭しか見つけられなかったけれど、それで充分だ。

ようやく、助け出したよ。やっと会えたね。随分長い間待たされてしまったけれど、今ここに君がいるだけで、僕は充分だ。待ち続けていた間の事なんて、もう忘れてしまった。あの時間は無駄ではなかったけど、僕にとってはどうでもいい事なんだ。もちろん、君を待つだけで、充分甘美な時間だった。でも今、目の前にいる君の気高さに比べたら、取るに足らないことだ。

ああなんて君は、美しいんだ。

「彼はね、紳士として素晴らしい方ですよ」

疲れた顔の老婦人は落ち窪んだ目を、安楽椅子に深く腰掛けてパイプを吹かす男に向けた。深い皺の刻まれた顔は、男に優しいげな声を掛けられて尚、不安げにしかめられている。

男は体を椅子ごとぐると反転させ、知性の光に彩られた淡いグレーの瞳を、窓の外に向ける。窓からは、見事に建て直されたロンドン橋が覗える。

「自己犠牲の精神を、何よりも美しいと思っていた。何も心配する事はないのです」

「ですがあれは……」

「嗜好は人それぞれですよ。何を美しいと感じるかは、人それぞれ違います。世の中には、バラを美しいと思わない人だって、少なからず存在するでしょう。同じ事ですよ」

老婦人は再び顔を伏せて、深い溜息を吐いた。皺だらけの手が、膝の上で硬く握り締められている。男は婦人に目もくれず、どこか遠い目で優美な橋を見つめていた。

「彼は魅せられてしまった。あれの為に犠牲となった人に。悪い事があるでしょうか？　どこか詩的で、美しいじゃありませんか」

婦人は不安げな表情を更に曇らせた。

彼女の息子はここ一週間、ずっと自室に引き籠もっている。何をしているのか、彼女も知らない。けれどそのきっかけは、分かっていた。

あの、薄汚れた髑髏。古い橋から出てきた、あの古い人骨。息子がどこからあんなものを拾って来たのか、彼女も知らない。ただ、これはあの橋の守り人だったのだと言う息子の言葉を聞いて、ぴんと来た。これはあのロンドン橋の人柱にされた人間の、髑髏なのだと。

老婦人は、膝の上で握り締めていた手を胸元まで持って行って、祈るように目を閉じた。

そう。

老婦人が去った後、男は口元に満面の笑みを湛えて、客間から薄暗い自室へと入る。

自己犠牲の精神は美しい。崩落を繰り返す脆弱な橋の為に命を投げ出した娘達は、何よりも美しい。どんなに美しく着飾った貴婦人でも、身を挺して橋を守り続けた彼女達の、その崇高な精神には、敵いはしない。

そしてそこにはロマンがある。六百年以上も前からずっと、変わらぬ気高い心を持ち続け、橋を守るため、ただそれだけの為に、そこに居続けた娘。

男は革張りのアームソファに腰を下ろす愛しい人に歩み寄り、ずっと、その白い手を撫でた。その手はあまりに華奢で、触れただけで壊れてしまいそうだった。

彼の愛しい人は、古い人骨だった。バラバラになっていた骨は丁寧に修復され、絹糸で一つ一つのパーツを繋ぎ合わせ、完全な形を成している。しかし頸骨から上、頭蓋骨だけは、存在しなかった。

「暗かっただろう」

男は、骨に向かって優しく声を掛ける。

苦しかっただろう、辛かっただろう。けれど、もう大丈夫だ。頭は友人に取られてしまったが、橋に捧げられた体はここにある。ああなんと、素晴らしい事だろう。あの気高い娘が今、目の前にいるなんて。

男は恍惚とした表情で骨だけの指に頬を寄せ、目を閉じた。

マイフェアレディ。

私の美しいひと。

**(後書き)**

犯罪の出てこないミステリー大賞に誘って頂いた記念に書いたら、ホラーになってしまいました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4720g/>

---

My fair Lady

2010年12月5日01時37分発行